

恋人の有無が中学生の意識に与える影響

— 「恋人のできやすさ」に着目して—

比較教育社会学コース	鈴木 翔
比較教育社会学コース	須藤 康介
比較教育社会学コース	荒川 智美
放送大学大学院修士科目生	寺田 悠希
比較教育社会学コース	澁谷 功太郎

The Effects on Self-consciousness of Junior High School Students
Depending on the Fact that They Have Boyfriend/Girlfriend or Not
—A Report Focusing on “Likelihood to Have a Boyfriend/Girlfriend”—

Sho SUZUKI, Kosuke SUDO, Tomomi ARAKAWA,
Yuki TERADA and Kotaro SHIBUYA

The purpose of our study is to make clear the significance of a boyfriend or girlfriend for junior high school students. For this purpose, we firstly investigated the determining factors of having a boyfriend/girlfriend, and then clarified the effects of the fact that one has a boyfriend/girlfriend on their self-consciousness.

As a result of our analyses, we got following two findings. First, there are various factors which determine whether junior high school students have a boyfriend/girlfriend or not, and the factors differ according to each student's gender. Furthermore, the levels of academic accomplishment of the school also make a difference. Second, when we analyze the effects of that fact on their self-consciousness, it is necessary to consider not only the very thing that one has a boyfriend/girlfriend or not, but also if she or he is likely to have a boyfriend/girlfriend. Our analysis suggests that a success in love for girls in junior high has a more complex meaning compared with that for boys.

目 次

1. 問題設定
2. 先行研究の検討と課題の設定
3. 分析軸の設定 —性別と学校の学力水準—
4. 使用するデータと変数の設定
 - A. 使用するデータ
 - B. 分析の構成と変数の設定
5. 分析
 - A. 課題1 「中学生の恋人の有無の規定要因は何か」の検証
 - B. 課題2 「恋人の有無が中学生の意識に与える影響はいかなるものか」の検証
6. 知見のまとめ
7. 結論と考察

1. 問題設定

本稿の目的は、「中学生にとって、恋人とはどのような存在であるのか」という問いのもと、中学生の恋人の有無の規定要因は何か、そして、恋人の有無が中学生の意識に与える影響はいかなるものかということを実証的に明らかにすることである。

なぜ、中学生の恋愛⁽¹⁾に着目するのか。その理由は2つある。第1に、恋愛に着目することが、中学生のアイデンティティ形成のプロセスを明らかにすることの一助になるからである。中学生は、発達段階が思春期と重なることもあり、互いにアイデンティティを確立しつつある周囲の仲間関係に特に多感になる時期であることが知られている（岩永 2007など）。昨今は土井（2008）が「優しい関係」と呼ぶように、学校生活において、生徒たちは極度に空気を読みあい、互いに気を遣いあう関係の中でストレスを抱えながら自我

を確立していることも指摘されている。つまり現代の中学生は、このような、特殊で独特な対人関係の圧力にさらされながら学校生活を送っているといえるだろう。このように、生徒たちのアイデンティティ形成において、交友関係は重要なテーマであり、そこに着目した研究は、特に目新しいものではない(児美川 2006など)。

ただし、従来の研究では、主に交友関係を友人関係に限定して捉え、その効果に着目してきた。だが、思春期という発達段階を考えれば、生徒たちの交友関係は友人に限定されるものではなく、好意を持つ身近な異性との交友関係もまた、友人関係とは別の形で生徒たちに影響を与えていることを想定できる。それにもかかわらず、現状、恋愛に着目した研究はそれほど多いとはいえない。中学生の恋愛に、友人関係とはまた違った意味づけを見出すことができるならば、それは中学生のアイデンティティ形成のプロセスをより精緻に把握する上で大きな貢献となるだろう。

本稿が中学生の恋愛に着目する第2の理由は、現代の人々に特有だとされる自己目的化した恋愛の特徴を端的に示すのが、中学生の恋愛であると考えられるためである。恋愛はかつて、結婚を前提としたものという意識が広く共有されていた(佐藤 2009)。しかし、周知の通り「付き合った人とは結婚しなくてはいけない」という価値観が主流だった時代は、遠い過去のものとなりつつある。山田(1996)が指摘したように、現代人にとって、恋愛は結婚とある程度分離したものであり、恋愛そのものに意義が見出されることは決して珍しいことではないのである。この文脈において恋愛は、「他者を求めるプロセス」であり、「自己のアイデンティティを保証できる契機」であるとして、結婚とは別の機能を担っているということが指摘されている(谷本 2008)。

小・中学生の41%は日ごろ「恋愛や好きな人」の話をしており、中学生の場合は学年を経るごとに恋愛や異性への関心が増大していくことが解明されている(宮武・鈴木・松井・井上 1996, NHK放送文化研究所 2008)。また、別の調査を参照すると、中学生男女のうち20%近くはデートを、10%前後はキスを経験済みであることも明らかとなっている(日本性教育学会 2007)。これらの結果から、中学生にとって恋愛は男女を問わず、具体的な行動を伴った関心事であることがわかる。しかし、現代の平均初婚年齢は男性で30.5歳、女性で28.8歳である(厚生労働省 2011)ことを考えると、15年近く先になるであろう結婚に、現在の中

学生の恋愛が直接結びついているとは考えがたい。だとすれば、中学生の恋愛は、結婚から遊離し、自己目的化した恋愛の最初の経験だと考えられないだろうか。中学生の恋愛に着目することで、現代社会に特有な自己目的化した恋愛の特徴を示すことができるかもしれない。

本稿は以上の問題関心のもとに、中学生の恋人の有無の規定要因は何か、恋人を持つことが中学生にどのような意識をもたらすのかという課題の検証を通じて、「中学生にとって、恋人とはどのような存在であるのか」という問いに接近する試みである。

2. 先行研究の検討と課題の設定

前述したとおり、就学年齢の生徒の恋愛、および異性との交友関係に関して、これまでに蓄積された研究はそれほど多くない。しかしながら、これまでの研究の中で、それらの関係の存在が生徒自身の意識にどのような効果をもたらすかという点については、ある程度明らかにされてきている。やや射程を広げて、中学生・高校生の恋愛とその周辺に関する研究をいくつかレビューすることにしよう。

まず、恋人がいる生徒のほうが、恋人のいない生徒よりも学校生活の充実感が高いということが、中学生や高校生を対象にした複数の調査で指摘されている(深谷・三枝・宮沢 1995, 丸井 2010など)。深谷・三枝・宮沢(1995)は、恋人がいる高校生は、学校生活の充実感のみならず、日常生活全般の充実感が高いことを明らかにしており、さらに、吉武(2010)は、中学生においては、友人関係がうまくいっている生徒よりも、異性の好きな人との関係がうまくいっている生徒のほうが、快の感情価が高いことを指摘している。これら一連の研究により、恋人の存在が生徒の学校内外の生活の充実感を引き上げる要因の1つとなりうることは、ある程度実証されてきているといえよう。

一方、生徒の恋愛経験が、教師が望ましいとする「向学校的」な振る舞いから生徒を引き離す要因になるという指摘も存在している。たとえば、丸井(2010)や丸井・橋本(2010)は、中学生において、恋愛経験のある生徒に授業を理解できない生徒が多いことを明らかにしている。また、同様に高校生を対象とした調査においても、恋愛経験のある生徒は、学業成績の下位者に多く存在していることが明らかにされてきている(深谷・三枝・宮沢 1995)。さらに、丸井(2010)は、女子中学生に限定してではあるが、恋愛

経験のある生徒ほど、部活動に充実感を感じず、教師に対して不満や反発心を持つ傾向があるという事実を指摘している。

以上の知見をまとめると、恋人の有無や恋愛経験は、学校生活の満足感や充実感を高める効果を持つが、そうした経験を持つ生徒は、教師が望ましいとしている向学校文化的な生活を送っているわけではなく、いわば学校の中にある逸脱的な文化に親和的な生活を送ることによって充実感を得ていると解釈することができる。

しかしながら、これらの研究には少なくとも3つの問題がある。第1の問題点は、そもそも生徒の恋人の有無が、何によって規定されているのかということについて、精緻な分析を加えた研究が存在していない点である。先行研究を概観すると、恋人の有無が生徒の学校生活の充実感や向学校性を規定しており、生徒の日常生活に大きな存在感を有していることがわかるが、そうした恋人を持つ生徒がどのような生徒なのかという部分については不問にされている。恋人の効果を分析する前段階として必要であるはずの、恋人の有無の規定要因の精緻な分析が十分にされていないということである。これを知ることは、生徒たちの日常生活を把握する上でも非常に重要になるだろう。

第2の問題点は、恋人の存在が生徒の意識に及ぼす因果的な効果が、実は十分には明らかにされていない点である。すなわち、学校生活の充実感が上がるのは、本当に恋人ができたがゆえなのか、あるいは恋人の有無を規定する背後要因（学業成績や容姿など）による影響なのかということについて、先行研究は踏み込んでいない。学校・学級・個人レベルの様々な要因を考慮した上で恋人の効果を検討しなければ、純粋に恋人がいるということが、中学生の意識にどのような影響を与えているのかはわからないだろう。

第3の問題点は、恋人ができるということが、恋人ができやすい生徒に恋人ができた場合と、恋人ができにくい生徒に恋人ができた場合で同じ効果であるのかという点も、詳細に検討されてこなかったことである。恋人のできにくいような生徒には、恋人ができることが自己の意識に何らかの影響を与えるが、恋人のできやすい生徒には、そうした恋人の存在の効果が顕著には見られないといったことも考えられる。この点は、これまでの研究では、まったくといっていいほど着目されてこなかった。

これら3点の問題によって、恋人がいる生徒像や、恋人を持つことそのものが生徒たちの日常生活におい

てどのような意味をもっているのかは、いまだ明らかになっていないといえる。以上の3点を踏まえ、本稿の分析課題を設定する。

本稿の分析課題は2つある。1つめは「中学生の恋人の有無の規定要因は何か」、2つめは「恋人の有無が中学生の意識に与える影響はいかなるものか」である。分析の流れを先取りすれば、1つめの課題を明らかにすることは、2つめの課題において「恋人の存在」そのものの影響を検証することを可能にする。以下、これらの分析を通じて、恋人を持つことが中学生の意識にどのような影響を与えるのか、また、その影響が恋人のできやすい生徒とできにくい生徒で異なるのかという問いに答えていく。

3. 分析軸の設定—性別と学校の学力水準—

課題の分析に際して、本稿では、2つの軸を用いて分析対象を分類した。第1の軸は性別による分類であり、第2の軸は高学力校／低学力校という、生徒が通っている中学校の学力水準による分類である。

性別に着目することは、恋愛を分析対象にする上で必須である。なぜなら恋愛は、多くの場合、男性と女性がお互いに魅力を感じあうことによって成立する関係であるが、男性が女性に感じる魅力と、女性が男性に感じる魅力は、異なることが指摘されているからである。どのような異性を好きになるかという基準の中には、性役割に繋がる要素が入り込んでおり、男性は、かわいらしく家庭的な「女らしい」女性に魅力を感じる一方で、女性は、たくましくて潜在的経済力を備えた「男らしい」男性に惹かれるという（山田1999）。また、中台・金山・前田（2003）によれば、誰に好意を持つかということに関しては、幼児の段階から性差が見られることが指摘されている。小学校段階と中学校段階においても、男女で異性に好かれる性格が異なるという調査結果も存在している（中野区地域センター部女性・青少年課1993）。しかしながら、先に挙げた中学生に関する先行研究の中で、男女差に留意した研究は驚くほど少ない。そこで本稿では、一貫して、恋人の有無の規定要因や恋人を持つことの影響における男女差に着目していく。

また、学力別に学校を分類する理由は、生徒の価値観が学校文化の影響を受けることが指摘されているためである。学校内の価値や規範は、一様なものではなく、学校によって様々な形態が存在することが、これまでの生徒文化研究において明らかにされている。た

たとえば、武内・荻谷・浜名(1982)は、学業達成の水準が上位の高校には、向学校的で学校の期待に沿った文化が、下位の高校には、反学校的で逸脱を志向する文化があることを指摘した。また荻谷(1986)は、こうした傾向が高校生だけに見られるのではなく、中学生の段階においても見られることを明らかにしている。ここから、中学校の学力水準によって、その学校の中で形成される文化も決して一様ではないこと、そしてまた学校文化の違いによって、恋人のいる生徒／いない生徒の特質の違いが生じても不思議ではないことが考えられる。

しかし、これまでの研究では、生徒たちが普段過ごしている学校の文化がすべて一様であると仮定され、学校文化の差異が恋人の有無の規定要因を変化させている可能性を無視してきた。実際、本稿の分析に用いた調査データを見ても、絶対的な学力尺度を測るための簡易学力スコア(0~10の値をとる)⁽²⁾の平均値を学校ごとに算出した場合、最小値3.94、最大値6.70、平均値5.38、標準偏差0.774と、学校による差を無視できない。もちろん、中学生の価値志向の分化をもたらす学校文化的要因は学力水準だけではないが、学力水準を1つの指標として、恋人の有無の規定要因が学校文化によって異なることを示すことができるだろう。こうした点を考慮し、本稿では、各学校の学力水準にも着目して、恋人の有無の規定要因を探っていく。

4. 使用するデータと変数の設定

A. 使用するデータ

本稿の分析に用いるデータは、東京大学教育学部比較教育社会学コースが、神奈川県公立中学校23校に通う中学2年生を対象に、2009年10月から2010年1月にかけて実施した「神奈川県の中学生の生活・意識・行動に関するアンケート」である。対象校は、神奈川県を4つの地域ブロックに分け、その中から選定された。調査項目は、主に生徒の日常生活や対人関係に関するものであり、教室内での集団自記式と教室内で配布した調査票を後日持参してもらう方法を併用して調査票を回収している。最終的な有効回答数は2874名、有効回収率は83.2%である。なお調査の概要は、東京大学教育学部比較教育社会学コース・Benesse教育研究開発センター『神奈川県公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告書』(2011)に記載されている。

本データの特徴は、恋人の有無はもちろんのこと、恋人の有無の規定要因として考えられるおおよその項

目が質問紙に含まれていることである。中学生を対象とした大規模調査では敬遠されがちな恋人の有無や、容姿やコミュニケーション能力の自己評価などを検証できることは、本稿において大きなメリットとなる。

B. 分析の構成と変数の設定

ここでは、本稿における分析の構成と、そこで用いる変数の説明を行う。次の第5章A節では、1つめの課題「中学生の恋人の有無の規定要因は何か」の検証を行う。ここでは恋人の有無に関連があると想定される独立変数を予め列挙し、それらの変数の影響力を比較するという分析を行った。

独立変数は、大きく4つの領域に分けて設定し、それぞれの領域において変数を3つずつ採用した。第1の領域は、「能力」である。そして、その1つめの変数は「校内成績」である。この質問項目では、学校内での学業成績を5段階で尋ねている。絶対的な尺度ではなく、相対的な校内成績が、恋人の有無にどのように影響しているかを知ることができる。2つめの変数は「実技教科が得意か否か」である。学校生活を過ごす上で重要視される能力は、ペーパーテストで測られる能力よりも、むしろその他の実技教科が得意であるか否かであることも想定できる。そのため、「音楽、美術、体育の中で得意なものがある」という質問項目をダミー変数化して用いた。3つめの変数は「コミュニケーション能力」である。本田(2005)が指摘するように、近年コミュニケーション能力は、教育現場でますます重要視されており、生徒の学校生活に少なからず影響を与えている可能性がある。そこで、「嫌いな人、苦手な人ともうまくつきあえている」など4つの質問項目に対する自己評価による回答を主成分分析で統合し⁽³⁾、連続変数として分析に投入した。

第2の領域は、「属性」である。これは、個人の努力では変えることが難しい属性要因の影響力について検討するための変数である。1つめの変数は「家庭の経済力」である。今回はその代理指標として、自宅にある8個の所有財⁽⁴⁾の有無を尋ね、所有数をスコアとして設定した。大学生調査の結果では、女性が男性に必要なものとして「収入」を重視するという指摘があり(菊地・越智・加藤・吉原1991)、小さな大人ともいえる中学生の段階においても、その影響が見られることを想定して分析に投じた。2つめの変数は、「異性のきょうだいの有無」である。これまでの研究においても、異性との交流が多い生徒は、おのずと恋人を作りやすい性格を帯びるという指摘がある(黒

川・三島・吉田 2008, 丸井・橋本 2010)。異性のきょうだいがいる生徒は、異性と接する機会が必然的に多くなることを想定し、この質問項目をダミー変数化して用いた。3つめの変数は、「容姿」である。容姿のよしあしは、時代や文化、あるいは個々人の選好によって規定される部分が大きいため、本来変数として設定することは難しい。しかし、「クラスメイトに容姿をほめられたことがある」という質問項目を用いることにより、その環境で容姿が「よい」とされる生徒を識別することが可能である。そこで、本稿ではこの質問項目をダミー変数化して用いた。

第3の領域は、「所属」である。当然のことながら、中学生は決められた時間に学校に行き、毎日ほとんど同じメンバーと顔を合わせて家庭に戻る。ゆえに学級以外への所属は困難であり、多くの生徒に差異はないと考えられる。しかしながら、その中でも差が出るのが、部活動への所属と塾への所属である。この効果を検証することにより、出会いの幅の広さが恋人の有無を規定するか否かを検証することができる。よって、ここでは「運動部所属」「文化部所属」「通塾」をとりあげ、いずれもダミー変数化して投入した。部活動を「運動部」と「文化部」に分けて設定したのは、西島編(2006)が示すように、運動部と文化部は活動内容

が違い、そこに所属することの意味や所属する生徒への印象が異なることを想定したからである。

第4の領域は、「校内地位」である。同じ学校に所属していても、生徒がクラスメイトや教師から受ける評価は違っている。そしてまた、こうした学校内の評価が恋人の有無に少なからず影響を及ぼしているということは想像に難くない。そのため、以下の変数を設定してある。1つめの変数は、「公的リーダー経験」である。学級委員や各種委員会役員などの経験を問うた質問項目を用い、その回答をダミー変数化して使用した。そして2つめの変数は「クラスの人気者」である。公的な地位ではないが、「クラスの人気者だ」という質問項目を用い、自己評価による回答をダミー変数化して用いた。3つめの変数は「教師からの評価」である。「クラスの人気者」と同様に、「学校の先生に高く評価されている」という質問項目への自己評価による回答をダミー変数化して設定した。

以上の4つの領域の変数を独立変数として設定し、恋人の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析を行うことにより、恋人の有無の規定要因を検証する。なお、すべての分析で独立変数の欠損がトータルで10%以上に及んだため、多重代入法で欠損値補正を行った。予測変数は他の独立変数であり、代入回数は

表1 使用する変数の設定

恋人ありダミー	現在、彼氏彼女がいる = 1, いない = 0
校内成績	同じ学校の中学2年生の中での成績が下のほう = 1, 中の下 = 2, 中くらい = 3, 中の上 = 4, 上のほう = 5
実技得意ダミー	音楽, 美術, 体育の中で得意なものがある = 1, ない = 0
コミュニケーション能力	コミュニケーション能力を尋ねる4つの質問項目を主成分分析によって統合して設定
所有財スコア	家庭の所有財8項目の所有数
異性きょうだいありダミー	異性のきょうだいがいる = 1, いない = 0
容姿ほめられダミー	クラスメイトに容姿をほめられることがある = 1, ない = 0
運動部所属ダミー	運動部に所属している = 1, 所属していない = 0
文化部所属ダミー	文化部に所属している = 1, 所属していない = 0
通塾ダミー	塾(家庭教師を含む)を利用している = 1, 利用していない = 0
公的リーダー経験ダミー	学級委員長または副委員長, 学校全体の委員会の委員長または副委員長の経験がある = 1, ない = 0
クラスの人気者ダミー	クラスの人気者だ = 1, 人気者ではない = 0
教師高評価ダミー	学校の先生に高く評価されている = 1, されていない = 0
学校生活満足ダミー	学校生活に満足している = 1, 満足していない = 0
自己肯定ダミー	自分に自信がある = 1, ない = 0
クラスメイトから馬鹿にされているダミー	クラスメイトから馬鹿にされていると感じる = 1, 感じない = 0

表2 使用する変数の記述統計量

	性別	有効度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
恋人ありダミー	男子	1421	0.000	1.000	0.110	0.309
	女子	1376			0.140	0.349
校内成績	男子	1434	1.000	5.000	2.610	1.030
	女子	1383			2.610	0.991
実技得意ダミー	男子	1446	0.000	1.000	0.760	0.479
	女子	1397			0.850	0.353
コミュニケーション能力	男子	1435	-2.387	2.578	-0.198	1.025
	女子	1385			0.209	0.924
所有財スコア	男子	1446	0.000	8.000	4.500	1.736
	女子	1397			4.540	1.707
異性きょうだいありダミー	男子	1424	0.000	1.000	0.520	0.500
	女子	1373			0.530	0.500
容姿ほめられダミー	男子	1425	0.000	1.000	0.230	0.419
	女子	1370			0.280	0.449
運動部所属ダミー	男子	1447	0.000	1.000	0.810	0.395
	女子	1396			0.520	0.500
文化部所属ダミー	男子	1447	0.000	1.000	0.090	0.287
	女子	1396			0.380	0.487
通塾ダミー	男子	1434	0.000	1.000	0.650	0.479
	女子	1390			0.580	0.494
公的リーダー経験ダミー	男子	1426	0.000	1.000	0.280	0.448
	女子	1368			0.270	0.447
クラスの人気者ダミー	男子	1427	0.000	1.000	0.180	0.382
	女子	1390			0.120	0.323
教師高評価ダミー	男子	1434	0.000	1.000	0.320	0.465
	女子	1376			0.260	0.438
学校生活満足ダミー	男子	1439	0.000	1.000	0.710	0.453
	女子	1380			0.710	0.455
自己肯定ダミー	男子	1414	0.000	1.000	0.320	0.467
	女子	1391			0.180	0.381
クラスメイトから馬鹿にされているダミー	男子	1436	0.000	1.000	0.342	0.475
	女子	1386			0.253	0.435

5回である。

続く第5章B節では、課題2「恋人の有無が中学生の意識に与える影響はいかなるものか」を検証する。本稿における分析の結論を先取りすると、第5章A節で性別や学校文化の違いによって、恋人の有無の規定要因に違いがあることが実証される。そこで、課題1のロジスティック回帰分析で推計された回帰係数から、各生徒の恋人を持つ確率を「恋人傾向スコア」と

して指標化した。第5章B節ではこれを用い、先行研究で得られた恋人がいることによる生徒の意識への影響について、より精緻な検証を行う。すなわち、恋人がいることによって生じる意識の変化が、「恋人がいる」という事実によって成立しているのか、それとも「恋人をできやすくする背後要因」によって成立しているのかの検証を行っていく。なお、今回従属変数として用いた生徒の意識の変数は、「学校生活満足ダ

ミー], 「自己肯定ダミー」, 「クラスメイトに馬鹿にされているダミー」の3つであり, 生徒の意識に与える影響について, 正負の両側面を測ることができるよう設定してある。用いた質問項目の変数の設定は表1, 記述統計量は表2にまとめてある。

5. 分析

A. 課題1 「中学生の恋人の有無の規定要因は何か」の検証

本節では, 「中学生の恋人の有無の規定要因は何か」の検証を行う。恋人の有無の規定要因を男女に分け, ロジスティック回帰分析を行ったものが, 表3である。以下では, 恋人の有無の規定要因がいかなるものかを概観し, その男女差を検証する。

表3を見ると, 男女を問わず恋人の有無に影響を与えているのは, コミュニケーション能力, 容姿ほめられダミー, 公的リーダー経験ダミーである。逆に, 所有財スコア, 異性きょうだいありダミー, 運動部所属ダミー, 通塾ダミー, 教師高評価ダミーは男女ともに恋人の有無に有意な影響を与えていない⁽⁵⁾。

続いて, 男子においてのみ, 恋人の有無の規定要因

となっているものから見てみよう。男子のみで恋人の有無の規定要因となっているのは, 実技得意ダミーだけである。男子の中で, 恋人の有無に影響を与える「能力」は, 主要5科目の校内成績ではなく, 目立ちやすくパフォーマンス性の高い実技教科であることは, 注目に値する。

次に, 女子においてのみ, 恋人の有無の規定要因となっているものを確認する。女子でのみ恋人の有無の規定要因となっているものは, 校内成績, 文化部所属ダミー, クラスの人気者ダミーである。このうち, 校内成績と文化部所属ダミーは負の効果を与えている。つまりこのことは, 女子においては, 校内成績がよいことや文化部に所属していることが, 恋人ができていくことにつながりうることを示している。一方, 正の効果を与えているものは, クラスの人気者ダミーである。女子において, 「校内地位」のうち, 公的リーダー経験ダミーも正の効果を示しているが, オッズ比を見ると, その影響力の大きさはクラスの人気者ダミーに及ばない。

この結果から, 恋人がしやすいのは, 男子では学級委員や各種委員会役員などの公的リーダーを務めるような生徒であり, 女子においては公的リーダーとい

表3 恋人の有無の規定要因 (ロジスティック回帰分析) 男女間比較

		男子			女子		
		回帰係数	オッズ比		回帰係数	オッズ比	
能力	校内成績	-0.016	0.984		-0.223	0.800	*
	実技得意ダミー	0.809	2.245	**	0.298	1.347	
	コミュニケーション能力	0.281	1.324	**	0.246	1.278	*
属性	所有財スコア	-0.023	0.977		0.012	1.012	
	異性きょうだいありダミー	-0.065	0.937		-0.069	0.933	
	容姿ほめられダミー	0.508	1.663	*	0.471	1.601	**
所属	運動部所属ダミー	0.113	1.119		-0.018	0.982	
	文化部所属ダミー	-0.263	0.768		-0.621	0.537	*
	通塾ダミー	0.083	1.087		-0.067	0.935	
校内地位	公的リーダー経験ダミー	0.511	1.666	**	0.290	1.337	†
	クラスの人気者ダミー	0.286	1.332		0.765	2.149	**
	教師高評価ダミー	-0.281	0.755		-0.092	0.654	
(定数)		-3.031	0.048	***	-1.680	0.186	***
Nagelkerke決定係数		0.087			0.093		
尤度比のカイ二乗検定		p=0.000			p=0.000		
N		1421			1376		

† : p<0.1, * : p<0.05, ** : p<0.01, ***<0.001

うよりは、むしろ成績は高くないが、クラスの人気者の生徒であるという対比ができるだろう。ここで、恋人の有無の規定要因は男女で異なることが示された。では、学校の学力水準の違いによって、恋人の有無の規定要因は異なるのであろうか。

まず、男子の分析から行う。男子の恋人の有無の規定要因を学校の学力水準別に検証したものが表4である。同じ男子でも、高学力校と低学力校では、恋人の有無の規定要因が異なる。学校の学力水準の高低を問わず、恋人の有無に影響を与えている変数は、実技得意ダミーと公的リーダー経験ダミーである。この2つの変数は、高学力校/低学力校の間で比較しても大きな差異が見られないことから、男子全体の中で共通の恋人がいる生徒の特徴であると捉えることができるだろう。

では、男子の中でも高学力校でのみ、恋人の有無の規定要因となりうるものは何であろうか。それは、コミュニケーション能力と異性きょうだいありダミーである。高学力校では、恋人の有無にはコミュニケーション能力が影響している傾向があるということがわかる。また、高学力校においてのみ、異性のきょうだいがいることが負の効果を与えている。これは先行研

究の知見に反する結果であり、解釈が非常に難しい。今後、さらなる検証の余地がある。

逆に低学力校の男子でのみ、恋人の有無に影響を与えているものは、容姿ほめられダミーである。容姿に恵まれていることは、高学力校では恋人の有無に明確な効果がないが、低学力校では正の効果を与える。男子に限定すれば、高学力校では、内面的能力が恋人の有無の規定要因として作用し、低学力校では外見の属性が恋人の有無に大きな影響を与えているようである。なお、高学力校でも低学力校でも、校内成績のよさは、恋人ができることにつながらないのは共通である。

続いて女子についても同様の分析を行う。女子の恋人の有無の規定要因を学校の学力水準別に対比させて検証したものが表5である。女子で、学校の学力水準を問わず恋人の有無に影響を与えているのは、容姿ほめられダミーとクラスの人気者ダミーである。

次に、高学力校と低学力校の違いに着目して考察を進める。やはり女子でも、高学力校と低学力校で、恋人の有無の規定要因が異なる。高学力校では、校内成績が負の効果になっているのに対して、低学力校ではそのような傾向は見られない。先の分析で、女子にお

表4 男子の恋人の有無の規定要因（ロジスティック回帰分析）学校間比較

		高学力校			低学力校		
		回帰係数	オッズ比		回帰係数	オッズ比	
能力	校内成績	-0.061	1.063		-0.113	0.894	
	実技得意ダミー	0.776	2.174	*	0.908	2.479	*
	コミュニケーション能力	0.310	1.363	*	0.236	1.266	
属性	所有財スコア	-0.032	0.969		-0.029	0.971	
	異性きょうだいありダミー	-0.426	0.653	†	0.353	1.424	
	容姿ほめられダミー	0.446	1.567		0.562	1.755	†
所属	運動部所属ダミー	0.383	1.466		-0.205	0.815	
	文化部所属ダミー	0.158	1.171		-0.797	0.451	
	通塾ダミー	-0.052	0.946		0.193	1.213	
校内地位	公的リーダー経験ダミー	0.539	1.714	*	0.557	1.745	*
	クラスの人気者ダミー	0.127	1.136		0.479	1.615	
	教師高評価ダミー	-0.404	0.668		-0.146	0.864	
(定数)		-3.038	0.048	***	-3.015	0.049	***
Nagelkerke決定係数		0.085			0.091		
尤度比のカイ二乗検定		p=0.000			p=0.000		
N		756			665		

† : p<0.1, * : p<0.05, ** : p<0.01, ***<0.001

表5 女子の恋人の有無の規定要因（ロジスティック回帰分析）学校間比較

		高学力校			低学力校		
		回帰係数	オッズ比		回帰係数	オッズ比	
能力	校内成績	-0.449	0.638	**	-0.042	0.959	
	実技得意ダミー	0.224	1.276		0.388	1.474	
	コミュニケーション能力	0.197	1.218		0.276	1.318	†
属性	所有財スコア	-0.003	0.997		0.055	1.057	
	異性きょうだいありダミー	0.079	1.083		-0.208	0.812	
	容姿ほめられダミー	0.493	1.637	†	0.530	1.700	*
所属	運動部所属ダミー	0.195	1.216		-0.141	0.868	
	文化部所属ダミー	-0.210	0.631		-1.001	0.367	*
	通塾ダミー	-0.087	0.917		-0.065	0.937	
校内地位	公的リーダー経験ダミー	0.161	1.074		0.387	1.472	
	クラスの人気者ダミー	0.723	2.061	*	0.816	2.261	*
	教師高評価ダミー	0.260	1.297		-0.414	0.661	
(定数)		-1.368	0.255	***	-2.106	0.122	***
Nagelkerke決定係数		0.114			0.121		
尤度比のカイ二乗検定		p=0.000			p=0.000		
N		687			689		

† : p<0.1, * : p<0.05, ** : p<0.01, ***<0.001

いて校内成績は負の効果を与えることがわかったが、こうした傾向は、高学力校でのみ有意に見られることが明らかとなった。

一方、低学力校では、コミュニケーション能力が正の効果を与えている。このことから、低学力校の女子は、恋人を獲得する際に、人間関係の調整といったコミュニケーション能力が要請される可能性が示唆された。また、文化部に所属することの負の効果が低学力校において顕著である。いわゆる「おとなしい子」が評価されづらいような学校文化が存在しているのかもしれない。その他の独立変数については、高学力校と低学力校で、それほど大きな効果の差異は見られない。

ここで本節の結果を小括しよう。本節では、性別と学校の学力水準を分けて、恋人の有無の規定要因を分析した。その結果明らかになったのは、まず、男女で恋人の有無を左右する要因が異なっているということである。また、性別による違いほど顕著ではないものの、学校の学力水準によっても恋人の有無の規定要因が異なることも明らかになった⁽⁶⁾。すなわち、誰が恋人をもちやすいかということには、男女によって、また学校文化によっても差異が見られるということであ

る。

B. 課題2「恋人の有無が中学生の意識に与える影響はいかなるものか」の検証

課題1の検証を行ったロジスティック回帰分析で推計された回帰係数をもとに、各生徒の恋人のできやすさを算出した。この確率を「恋人傾向スコア」と呼ぶ。男子の平均値は0.107、女子の平均値は0.142であった⁽⁷⁾。ここで、3つの各種の意識を従属変数とし、恋人傾向スコアと恋人ありダミーを独立変数とするロジスティック回帰分析を行う。恋人傾向スコアの効果を統制してもなお、恋人ありダミーの回帰係数が統計的に有意であれば、恋人の有無が意識に影響を与えたと解釈することができる。また、恋人傾向スコアと恋人ありダミーの交互作用項を独立変数に含め、恋人が得意な生徒に恋人ができた場合と、恋人が得意にくい生徒に恋人ができた場合の効果の違いについても分析する。なお、すでに述べたように、本稿が着目する意識とは、「学校生活満足感」、「自己肯定感」、「クラスメイトに馬鹿にされている意識」の3つである。恋人傾向スコアは、回帰係数の解釈を容易にするため、0.1単位に換算して分析に投入している。

表6 恋人の有無が学校生活満足感に与える影響 (ロジスティック回帰分析)

		モデル 1			モデル 2		
		回帰係数	オッズ比		回帰係数	オッズ比	
男子	恋人傾向スコア (0.1単位)	0.593	1.810	***	0.718	2.050	***
	恋人ありダミー	0.181	1.199		1.130	3.095	**
	恋人傾向スコア×恋人ありダミー (定数)	0.286	1.331	***	-0.713	0.490	**
	Nagelkerke決定係数	0.044			0.057		
	尤度比のカイ二乗検定	p=0.000			p=0.000		
	N	1421			1421		
	女子	恋人傾向スコア (0.1単位)	0.022	1.022		0.025	1.025
恋人ありダミー		-0.145	0.865		-0.116	0.890	
恋人傾向スコア×恋人ありダミー (定数)		0.874	2.397	***	-0.016	0.984	
Nagelkerke決定係数		0.001			0.001		
尤度比のカイ二乗検定		p=0.000			p=0.000		
N		1376			1376		

† : p<0.1, * : p<0.05, ** : p<0.01, ***<0.001

表7 恋人の有無が自己肯定感に与える影響 (ロジスティック回帰分析)

		モデル 1			モデル 2		
		回帰係数	オッズ比		回帰係数	オッズ比	
男子	恋人傾向スコア (0.1単位)	0.861	2.365	***	0.999	2.715	***
	恋人ありダミー	0.306	1.358		1.336	3.806	***
	恋人傾向スコア×恋人ありダミー (定数)	-1.741	0.175	***	-0.72	0.487	**
	Nagelkerke決定係数	0.115			0.125		
	尤度比のカイ二乗検定	p=0.000			p=0.000		
	N	1421			1421		
	女子	恋人傾向スコア (0.1単位)	0.615	1.849	***	0.575	1.777
恋人ありダミー		-0.223	0.800		-0.687	0.503	
恋人傾向スコア×恋人ありダミー (定数)		-2.476	0.084	***	-2.413	0.090	†
Nagelkerke決定係数		0.084			0.086		
尤度比のカイ二乗検定		p=0.000			p=0.000		
N		1376			1376		

† : p<0.1, * : p<0.05, ** : p<0.01, ***<0.001

まず、「学校生活満足感」と「自己肯定感」への影響について検討する。男子の結果について表6, 7における男子モデル1の分析結果を見ると、恋人がいることは、いずれの従属変数にも有意な影響を及ぼさない。つまり、恋人ができたからといって、学校生活満足感や自己肯定感が高まるわけではないのである。しかし、交互作用項を含む男子モデル2で交互作用を検証すると、学校生活満足感と自己肯定感の双方について、恋人傾向スコア×恋人ありダミーが負に有意である。つまり、恋人傾向スコアが低い生徒（＝恋人ができてにくい生徒）においては、恋人がいることが学校生活満足度や自己肯定感を高める効果が大きいことがわかる。だが見方を変えると、恋人傾向スコアが高い生徒（＝恋人がしやすい生徒）においては、恋人がいることが学校生活満足度や自己肯定感を高めるわけではないということもまた指摘できる。

次に女子の結果を見ていく。女子についても、まず交互作用項を含まない表6, 7の女子モデル1の分析結果を見ると、男子と同様に、恋人がいることは学校生活満足と自己肯定感には有意に影響を与えないことがわかる。やはり、恋人ができたからといって、学校生活満足感や自己肯定感が高くなるわけではないということである。さらに、交互作用項を含む女子モデル2を見ても、すべての分析において、恋人傾向スコア

×恋人ありダミーは有意ではない⁽⁸⁾。したがって女子は、男子と違い、恋人のできやすさによって、恋人がいることの効果が異なるとはいえない。つまり、女子は総じて、恋人の有無と学校生活満足感や自己肯定感がほとんど関係しない。

ただし、男子との比較で着目すべきなのは、クラスメイトから馬鹿にされている意識に対する恋人の影響である。表8の女子モデル1を見ると、「恋人がいる」ことはクラスメイトから馬鹿にされているという意識を大きくすることがわかる。この点は男子とはまったく異なった傾向を有する点である。もっとも、「クラスメイトから馬鹿にされている」というのは、あくまで本人の認識であることには注意が必要である。実際に馬鹿にされているというわけではないが、恋人ができたことによって、クラスメイトとやや疎遠になり、後ろめたさのような感情が芽生えている可能性を指摘できる。さらに考察をすれば、このような後ろめたさに似た感情によって、女子の学校生活満足感や自己肯定感は、恋人ができてでも高まらないのではなかろうか⁽⁹⁾。

課題2の分析結果を小括する。「恋人がしやすい男子」、および「女子」においては、恋人の存在が学校生活満足感や自己肯定感に影響を与えているわけではない。だが、「恋人ができてにくい男子」においては、恋人の存在は学校生活満足感や自己肯定感を高める効

表8 恋人の有無がクラスメイトに馬鹿にされている意識に与える影響（ロジスティック回帰分析）

		モデル1		モデル2			
		回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比		
男子	恋人傾向スコア (0.1単位)	-0.048	0.872	-0.01	0.990		
	恋人ありダミー	-0.137	0.953	0.193	1.212		
	恋人傾向スコア×恋人ありダミー (定数)	-0.573	1.079	***	-0.611	0.543	
	Nagelkerke決定係数	0.001		0.007			
	尤度比のカイ二乗検定	p=0.000		p=0.000			
	N	1421		1421			
女子	恋人傾向スコア (0.1単位)	-0.151	0.860	*	-0.169	0.845	†
	恋人ありダミー	0.416	1.516	*	-0.291	1.337	
	恋人傾向スコア×恋人ありダミー (定数)	-0.926	1.365	***	-0.071	1.074	
	Nagelkerke決定係数	0.008		0.008			
	尤度比のカイ二乗検定	p=0.000		p=0.000			
	N	1376		1376			

† : p<0.1, * : p<0.05, ** : p<0.01, ***<0.001

果をもつ。また、女子の場合は、恋人の存在がクラスメイトから馬鹿にされていると感じる要因として機能している。よって、先行研究で言及されていた「恋人がいることが学校生活満足感につながる」という知見が、本節での分析を経て、「実際に恋人がいること」による効果ではないということが実証されたことになる。

6. 知見のまとめ

本稿では、中学生の恋人の有無の規定要因は何か、恋人の有無が中学生の意識に与える影響はいかなるものかという課題の検証を通じて、「中学生にとって、恋人とはどのような存在なのか」という問いに接近してきた。そこで明らかになったことは、大きく分けて以下の2つである。

第1に、1つめの課題の検討から、中学生の恋人の有無について影響を与える要因が存在しており、またそれは、性別、さらにその中でも高学力校/低学力校によって異なっていることが明らかになった。

具体的には、まず男子においては、周囲から認められやすい外的な要素に秀でていることが正の効果をもつ。一方で女子は、たとえば校内成績がよいことや文化部への所属が、負の効果をもたらしており、何かに秀でており、向学校的な学校生活を過ごすことがむしろ恋人をできづらくしている可能性すらある。また、学校の学力水準を分析軸に加えると、恋人の有無の規定要因はさらに変化する。高学力校の男子では、コミュニケーション能力が、低学力校の男子では、容姿が優れていることが、それぞれ正の効果をもたらしている。そのことから、高学力校の男子ではより内面的な能力が恋人の有無を作用し、低学力校ではより外面的な属性が恋人の有無に影響するという対比ができる。一方、高学力校の女子では、校内成績が負の効果をもち、低学力校の女子では、コミュニケーション能力が正の効果をもつ。女子は、低学力校のほうがより内面的能力を重視する傾向が強いということも考えられる。

第2に、2つめの課題の検討を通じて、恋人の有無が中学生の意識に与える影響を分析するとき、「恋人の存在」と「恋人のできやすさ」とともに考慮する必要性があることが明らかにされた。男子の場合、恋人のできやすさによって、恋人の存在が学校生活満足度や自己肯定感に及ぼす効果が異なり、恋人のできにくい生徒においてのみ、それらを上昇させる効果があ

る。また女子の場合、恋人の存在はクラスメイトに馬鹿にされていると感じる度合いを高める可能性があることもわかった。

7. 結論と考察

これらの分析結果を受けて、ここで改めて、中学生にとって恋人とはどのような存在なのかについて考察を加え、本稿の結論とする。

本稿で得られた知見の中でも、恋人の存在が女子の意識に及ぼす負の影響は注目に値する。というのも、思春期において恋愛に興味を持つ傾向は、男子より女子に顕著に見られるからである。事実、先に引用した小中学生を対象とした調査を参照すれば、男子よりも女子のほうが恋愛や好きな人の話をする割合が大きいことが明らかとなっている（NHK放送文化研究所 2008）。大きな関心があるのだとすれば、当然恋人を得たときの充実感も大きいものであると想定されるが、分析の結果は真逆を示している。なぜこのような現象が生じるのだろうか。これは学校生活における女子特有のコミュニケーションの存在が、関連しているのだと考えられる。

「学校生活で女子はグループを作る」といわれるように、女子がグループを形成し、そのグループ内での和を重要視する傾向があることが多く指摘されている（古久保 2003など）。このことは女子が、男子に比べて、友人関係を気にしながら、学校生活を送ることを強いられていることを示している。本稿から得られた知見と、その点を照らし合わせると、女子が恋人を持つことは、友人との不和を生じさせる要因として機能するため、そのジレンマに苛まれることが推察できる。

あるいは、別の見方をすれば、友人との関係がうまくいっていない女子生徒の代替的、もしくは逃避的な行動の1つとして、恋愛が選択されやすい可能性も十分に考えられる。いずれにせよ、中学生の女子にとっての恋愛は、男子とは異なる意味を内包させている可能性が示唆できるのである。このように本稿では、中学生の恋愛に着目することで、これまでの研究では着目されてこなかった「恋愛」という経験を通じた、中学生のアイデンティティ形成のプロセスの一側面を明らかにすることができた。

また、本稿では、家庭の経済的な豊かさや学業成績などの将来の社会的地位につながりうる要素が恋人の有無に明確な影響を与えていないことが明らかになっ

た。特に、女子においては学業成績が負の影響を与えていた。さらに、恋人がいることは、恋人ができにくい男子を除いては、学校生活満足感と自己肯定感を高めることはないことも示された。以上のことから、中学生の恋愛は、恋人に高い社会的地位を期待するという将来への合理性を伴っていないのみならず、日常生活における充実感を獲得するといった現在の合理性も伴っていないことが示唆される。にもかかわらず、多くの生徒は恋愛に強い関心を抱いている。いわば、「ラブ・イデオロギー・トラップ」とでも呼ぶべき現象が生じているのではないだろうか。中学生の恋愛は、現代社会に特有だとされる自己目的化した恋愛の特徴を端的に示していると考えられる。

最後に本稿の残された課題について述べる。まずは、本研究の対象とならなかった学年や他の学校段階、および結婚適齢期との比較を行う必要があることが挙げられる。今回の分析では、中学2年生を対象としていたが、恋愛に興味を持ち始めたばかりの1年生や、高校受験を目前に控えた3年生などでは、今回の分析とは違った方向性が見出される可能性がある。また、高校生や大学生では、学校の生活スタイルの違いや恋愛観の相違から違った結果が生み出されるかもしれない。さらに、恋人の有無が、学校生活満足感や自己肯定感、クラスメイトに馬鹿にされている意識以外に与える影響についても分析の余地がある。

しかし、本研究の分析を経て、思春期の真ただ中を生きる中学生が興味を持つ対象である、恋愛に関して、その効用および弊害の一側面が明らかにされたということには、非常に意義があると考えられる。残された課題に応えることで、本分野の研究のさらなる発展を担っていきたい。

(指導教員 本田由紀教授)

<注>

- (1) 恋愛の定義には学問レベルにも日常生活レベルにも様々な議論があるが、本稿では「男女が互いに相手をこいしうこと。また、その感情」(広辞苑第五版)という定義を採用し、同性愛は議論の対象から外すものとする。
- (2) 「簡易学力スコア」は、生徒に「 $x + 6 = 2.5x - 7$ という等式から x を求めることができる」「アサガオの花を見ておしべとめしべの位置が分かる」など10項目を尋ねて、それを0~10のスコア化した変数である。学力調査を実施したわけではないので、学力を捉える変数として十分とは言い難いが、すべての項目は中学校の学習指導要領に沿ったものであり、また、 a 係数は0.749であるので、一定の信頼性は担保されていると考えられ

る。

- (3) 主成分分析の結果、「嫌いな人、苦手な人ともうまくつきあえている」の成分負荷量は0.635、「友だちから悩みを打ち明けられることが多い」の成分負荷量は0.707、「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」の成分負荷量は0.758、「自分には人を引っっぱっていく力がある」の成分負荷量は0.759であった。寄与率は51.3%である。
- (4) 家庭の所有財は、インターネットの回線、美術品、食器洗い機、デジタルカメラ、プラズマ/液晶テレビ、衣類乾燥機、自分の部屋、文学作品の8項目で尋ねている。
- (5) ただし、運動部の中身を詳細に見ると、男女ともにラケットを使わない球技の部活動(サッカー部、野球部、バスケットボール部、ソフトボール部)に所属している生徒に、恋人がいる生徒が多いことなどがわかる。
- (6) ここで、学校の学力水準による違いと見られるものは、実は地域の経済状態(つまり裕福な地域かどうか)による違いなのではないかという疑問が生じるが、必ずしもそうではない。試みに、大学進学を希望する生徒の割合や、家庭の所有財の平均値などによって学校を区分して、同様の分析を行ったところ、学力水準で区分したときほど、明確な恋人の有無の規定要因の違いは見出されなかった。つまり、恋人の有無の規定要因を左右するものとして、学校の学力水準はそれほど有効な変数なのである。
- (7) 恋人傾向スコアの平均値以外の記述統計量は以下の通りである。男子では、最大値0.484、最小値0.009、標準偏差0.072、女子では、最大値0.564、最小値0.020、標準偏差0.090である。
- (8) モデル2において、恋人ありダミーの回帰係数は「恋人傾向スコアが0の生徒にとっての恋人の効果」を意味する。また、恋人傾向スコアの回帰係数は「恋人がいない生徒にとっての恋人傾向スコアの効果」を意味する。そして、恋人傾向スコア×恋人ありダミーの回帰係数は、「恋人傾向スコアが0.1上になると、恋人ありダミーの効果がいくらか大きくなるか」を意味する。
- (9) この推論を裏付けるため、「自分の気持ちと違っていても、人が求めるキャラを演じてしまうことがある」という質問項目を従属変数にして、表6~8と同様の分析を行ったところ、女子においてのみ、恋人がいることがこの行動を増加させる(10%水準で有意)ことが示された。つまり、恋人がいる女子中学生は、周囲に気を遣う学校生活を送っていると考えられる。

<参考文献>

- 土井隆義, 2008, 『友だち地獄』筑摩書房。
- 深谷和子・三枝恵子・宮沢良美, 1995, 「相手のいる高校生をめぐって」『モノグラフ・高校生』vol.43, pp.69-82。
- 古久保さくら, 2003, 「女の子が群れるということ——少女たちの社会化」天野正子・木村涼子編『ジェンダーで学ぶ教育』世界思想社, pp.153-67。
- 本田由紀, 2005, 『多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版。
- 岩永雅也, 2007, 「分岐点としての中等教育」岩永雅也・稲垣恭子編『教育社会学』放送大学教育振興会, pp.97-109。
- 菊岡剛彦, 1986, 「閉ざされた将来像」『教育社会学研究』第41集, pp.95-109。

- 菊地栄治・越智康詞・加藤隆雄・吉原恵子, 1991, 「女子学生文化にみるジェンダーの現代的位相——女性内分化の視点から」『第43回日本教育社会学会大会発表要旨集録』 pp. 101-6.
- 児美川孝一郎, 2006, 『若者とアイデンティティ』法政大学出版局。
- 厚生労働省, 2011, 「平成22年人口動態統計月報年計(概数)の概況」(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai10/index.html>, 2011年9月6日取得)
- 黒川雅幸・三島浩路・吉田俊和, 2008, 「小学校高学年児童を対象とした異性への寛容性尺度の作成」『実験心理学研究』第48巻第1号, pp. 32-9.
- 丸井淑美, 2010, 「中学生の異性交遊の有無とそれに伴う恋愛行動経験とその背景要因」『「教育とジェンダー」研究』第8巻, pp. 2-15.
- 丸井淑美・橋本紀子, 2010, 「中学生・高校生の交際及びそれに伴う恋愛行動とその背景要因との関連」『女子栄養大学紀要』第41巻, pp. 61-75.
- 宮武朗子・鈴木信子・松井豊・井上果子, 1996, 「中学生の恋愛意識と行動」『横浜国立大学教育紀要』第36巻, pp. 173-96.
- 中台佐喜子・金山元春・前田健一, 2003, 「幼児の仲間集団における人気度と社会的スキル——同性仲間と異性仲間からの評価」『広島大学心理学研究』第2巻, pp. 151-7.
- 中野区地域センター部女性・青少年課, 1993, 『小・中学生の生活と意識に関する調査——性別役割分業をめぐって』
- NHK放送文化研究所, 2008, 『小・中学生のテレビ・メディア利用実態調査』
- 日本性教育協会編, 2007, 『「若者の性」白書——第6回・青少年の性行動全国調査報告』小学館。
- 西島央編, 2006, 『部活動——その現状とこれからのありかた』学事出版。
- 佐藤典子, 2009, 「ジェンダーステレオタイプと恋愛・家族関係」佐藤典子編『現代人の社会とこころ——家族・メディア教育・文化』 pp. 165-93. 弘文堂。
- 武内清・菊谷剛彦・浜名陽子, 1982, 「学校社会学の動向」『教育社会学研究』第37集, pp. 67-82.
- 谷本奈穂, 2008, 『恋愛の社会学——「遊び」とロマンティック・ラブの変容』青弓社。
- 東京大学教育学部比較教育社会学コース・Benesse教育研究開発センター, 2011, 『神奈川県公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告書』ベネッセコーポレーション。
- 山田昌弘, 1996, 『結婚の社会学——未婚化・晩婚化は続くのか』丸善。
- , 1999, 「恋愛・結婚」江原由美子・山田昌弘編『ジェンダーの社会学』放送大学教育振興会, pp. 43-53.
- 吉武尚美, 2010, 「中学生の生活満足度に関連するポジティブ・イベント——イベントの項目収集と相互影響関係の検討」『教育心理学研究』第58巻第2号, pp. 140-50.